

# <新しい能力>とその評価方法

京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授  
**松下 佳代**



### 研究の背景

1990年代以降、初等教育から高等教育にいたるまで、今まで重視されていた学力だけでなくさまざまな能力が、世界各国で教育目標に掲げられ、評価されるようになってきました(図1)。私たちは、これらの能力がポスト近代社会において求められるようになった能力であると捉え、それを<新しい能力>と総称することにしました。そしてその特徴を明らかにするとともに、形成や評価のあり方について提案したいと考えました。

### 研究の成果

方法としては、系譜や概念の分析を行う理論研究、他国(オーストリア、スウェーデン、フィンランド、アメリカ)の動向分析を行う比較研究、評価方法の開発と実施を行う実践研究の3つを組み合わせで行いました。その結果、以下のことが明らかになりました。

①<新しい能力>(図1に挙げたそれぞれの能力)は、特定の職務での業績の水準を左右する個人の属性としての能力(コンピテンシー)をルーツとし、認知的な能力だけでなく対人関係能力や人格特性なども含まれるという共通点をもっているが、そこには少なくとも、「要素的・脱文脈的アプローチ」と「統合的・文脈的アプローチ」の2つのアプローチがみられること(図2)、②国によって<新しい能力>の影響は異なるが、日本ではPISA(OECD生徒の学習到達度調査)をきっかけにして政策転換と構造変化が生じ、<新しい能力>の目標化と目標-評価システムの導入が進んでいる

こと、③<新しい能力>の評価方法としてパフォーマンス評価があるが、そこで用いられる評価基準表(ルーブリック)は質の数値化のツールになりやすいので、学びの質の多様性を把握する別の手立てが必要であること、などです。

平成22年には、以上の成果の一部を単行本(『<新しい能力>は教育を変えるか』ミネルヴァ書房)として刊行することができました(図3)。

### 今後の展望

平成24年度からの新しい科研費では、大学におけるパフォーマンス評価に焦点をあてて、どうすればそれが、学習者に知識の組み換えや持続的な変化をもたらす深い学習を促すことになるのかを研究しています。医療教育分野で使われているシミュレーション場面を設定して実演させるOSCEという評価方法にリフレクションを組み合わせたOSCE-Rを開発したり、問題基盤型学習のための評価方法を考案したりしています。<新しい能力>の評価が単なる成績評価ではなく、学習としての意味をもつようなものになることを願って研究を進めています。

### 関連する科研費

平成21-23年度 基盤研究(B)「ポスト近代社会における<新しい能力>概念とその形成・評価に関する研究」

平成24-26年度 基盤研究(C)「深い学習を促すパフォーマンス評価の開発—OSCE-Rを中心に—」

名称	機関・プログラム	年
<b>【初等・中等教育】</b>		
生きる力	文部科学省	1996
リテラシー	OECD-PISA	2000~15(3年ごとに調査)
人間力	内閣府(経済財政諮問会議)	2003
キー・コンピテンシー	OECD-DeSeCo	2003
<b>【高等教育・職業教育】</b>		
就職基礎能力	厚生労働省	2004
社会人基礎力	経済産業省	2006
学士力	文部科学省	2008
汎用的技能/分野別	OECD-AHELO	2010~12 試行試験
<b>【労働政策】</b>		
エンプロイアビリティ	日本経営者団体連盟(日経連)	1999
<b>【成人一般】</b>		
成人力	OECD-PIAAC	2011~12 実施

図1 わが国の教育に影響を与えている<新しい能力>

要素的・脱文脈的アプローチ	統合的・文脈的アプローチ
要素的 能力をいくつかの要素に分割した上で、特定の職務を表わすコンピテンシー・モデルを組み立てる	統合的 ある特定の文脈における要求に対して、個人の内的属性を結集して応答する
脱文脈的 能力を個人の内的属性とみなす	文脈的 文脈によって変化する対象世界・道具や他者との相互作用を含む
【典型例】 経営学のコンピテンシー	【典型例】 OECD-DeSeCoのキー・コンピテンシー

図2 <新しい能力>の2つのアプローチ



図3 刊行された本